

先日、ある地域スポーツの研修会で受講生からこんな言葉を聞いた。「NPO法人格を取得してもメリットが感じられない」。文部科学省は地域スポーツクラブに対し、法人格の取得を10年も前から推奨している。地域でスポーツ活動を行っているだけならば、法人格を取得しようがしまいが、そう大きな違いは感じられないかもしれない。むしろ書類作成などの手間ばかり増えてデメリットと感じるかもしれない。

「受動的」では、法人化のメリットを受けることはできない。むしろ「能動的」に情報の公開や行政との連

SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



携、助成金の活用など、自らが働きかけない限り、メリットは感じることはできないだろう。法人化した途端に会員、収入が増えるなんてことは決してあり得ないのである。

助成金に関しても同じこ

い」「助成金を使って芝生のグラウンドを作りたい」などが大半である。

しかし、助成金の意味を理解しないまま助成金申請をしてしまっているケースも少なくない。本来、助成金とは、支出に対して助成

る。この説明をすると大概、自己資金がないのであきらめるパターン（助成金ありきで考えている）か、助成金を取ってしまってから困っているパターン（自己資金が足りない）などをよく見かけるのである。

ないこともあるだろう。なぜならこれらの恩恵は能動的に動くからこそ、私たちにとって武器になるのである。結局、その武器の効果は使う側の能力次第ということなのである。

とである。昨今、スポーツ振興くじ「もも」の売れ行きが好調で、スポーツ界全体に「スポーツ振興くじ助成」への期待が高まっている。寄せられる相談の内容は「助成金を取ってスポーツイベントを開催した

することが基本であり、何も支払っていないものに助成金を支給してくれるものではない。簡単にいえば、まずはかかる資金を自らで用意し、支払った後に、確定した金額に対して助成をしてくれるものなのであ

NPO法人化にしろ、助成金の申請にしろ、スポーツ自らが能動的に動かない限り、そのどちらの恩恵も受けられるものではない。受動的なままこれらの恩恵を受けようとすれば、時には負担にしか感じられ

2011年、受動的な日本スポーツ界の目標は能動的に動いていくことである。そのための武器は身の回りにたくさん転がっている。それに気付くか。それを使いこなせるか。その答えはスポーツに携わる私たち自身に問われているのである。

(REGISTA有限責任事業組合代表)

隔週土曜日掲載